

歴史のなかの群居

- 生活共同体と建築の相関関係に関する研究 -

中谷礼仁研究室 家の根本義ゼミナール

5210A013-8 伊藤 杏奈

家 共同体 住宅
ユートピア

第1章 序論

¹⁻¹ 本研究の背景 本研究は、とくに戦後顕著にあらわれてきた家と家族の齟齬について、これまでたびたび語られてきた歴史的問題提起を引き受けた形で、新たな視点で解題しようとする射程の長い試みの第一歩である。

現在既に、居住は「家⇨家族」という図式にとどまらない社会的問題として認識されるようになった。その底面には、家族という同一性(家族なるもの)が反復されてきた社会的思考方法と、歴史上で家族が担保してきた〈自然〉の人間のありようが折り重なったまま存在している。試みに、あらためてその拘束関係を解き放ち、生活を共同(し、ある一定の期間存続)する単位の集団と、その集団根拠として生起する空間との関係性から、再考察できるのではないだろうか。

¹⁻² 本研究の目的 すなわち本研究では、戦後日本における核家族を一般解とする空間の解法ではなく、歴史的諸段階で生じた具体的な〈生活〉を共同する集団のありようと、それを収容する器として相対的に立ち現れるだろう空間との関係を描く。この姿勢もまた、われわれ人間社会と共にある空間の問題を解く一端となると考えるからである。よって、本研究の目的は以下の通りである。

①家族が内包する人間の〈自然〉的性質を基準に、歴史上に現れた具体的集団を類型化し、家族とは対極的な集団の性質を明らかにする(第二章)

②①で極的事例とした集団とそれを収容する建築空間との関係を、その集団の集合原理・集団を成立させた社会背景も含めて明らかにする(第三章～第六章)

③②の比較考察から、現代における家族と建築の抱える問題を指摘し、それらを乗り越える空間への手がかりを指摘する(第七章)

第2章 歴史のなかの群居

²⁻¹ 家族という共同体の特殊性と非特殊性 家族の生物学的定義は、人間界の営みを作り出してきた最小単位ともいえよう。すなわち、一個の人間を存在させるのは、一対の男・女(つがい)における性的契約状態が前提である。吉本隆明によれば、家族は〈夫婦〉を、性交渉の許されない〈兄弟〉から疎外したときにはじめて成立した。

本研究で問題にする生活共同集団なる〈族〉を、つがいを基準にした〈性〉の関係(Y軸)と、対人間としての〈自然〉的総関係(X軸)の2つに引き裂いた中に、諸集団を配置したものが、図1である。X軸は有機的な存在に留め

るための集団の身体的強度を示す。人間の手に触れた時点から、本来の「外なる現実」としての性質を遊離し、人間存在と関わっていく。「規範」は、この人間社会における「自然」との間を往還しながら、集団の秩序を合目的に成形するものである。すなわち、「自然」と「規範」はこの図において便宜上両極に布置されたが、実時空においては両要素は互いにフィードバックされ、集団を有機的な存在にとどめている。

すなわち、核家族は、〈夫婦〉の排他性を原則とすることで集団性を獲得しており、社会的制度としての家族と、自然的人間としての結合性質を内包したX軸上に広がる特徴を持つといえる。

これらの極限型としての事象は、以下〈細胞的〉、〈機械的〉、〈動物的〉、〈客体的〉の4つに類型化でき、それぞれ、シェーカー教(第3章)、ハクスリーの『すばらしい新世界』(第4章)、ヴィラ21(第5章)、ホグ・ファーム(第6章)といった事例が該当する(表1)。すなわち、家族的なるものは、「性」「自然(その調整としての規範)」の問題を内包しな

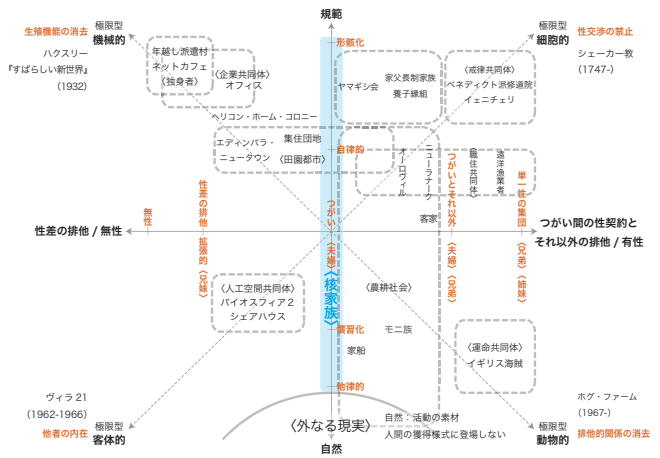


図1 人間の再生産に関わる諸集団のマップ。男・女の〈性〉の総関係と、人間と自然の総関係を指標とした。〈夫婦〉は性交渉を許された一対の男・女(対偶婚を含む)であり、〈兄弟〉/〈姉妹〉は性交渉の許されない男・女である。この関係は、事実ではなく〈対なる幻想〉として担保されている。

事例	継続年	場所	人数(初期/最盛期/現在)	類型	具体的性質
3 シェーカー教	1774~	アメリカ・ニューヨーク州ニューレバノン(ほか18箇所(最盛期))	(9/6000/3)	〈細胞的〉(第一象限)	性交渉の禁止による、〈兄弟〉〈姉妹〉的関係を保持した共同生活
4 『すばらしい新世界』	1932(出版年)	2540年 ^{※1} のロンドン	—	〈機械的〉(第二象限)	生殖機能の消去による、つがいの固定化を問題としない快楽的性関係のみの共同生活
5 ヴィラ21	1962~1966	ロンドン・シェンレイ精神病院内	(19+スタッフ数名)	〈客体的〉(第三象限)	自己と他者の区別の意識的障害により、種としての身体を喪失した症状を持つ患者たち(と治療者)の共同生活
6 ホグ・ファーム	1967~	アメリカ・カリフォルニアサンフェルナンドバレー(ほか)	(50/500,000 ^{※2} /不明)	〈動物的〉(第四象限)	自由な性関係により、〈夫婦〉〈兄弟〉なる相互排他的関係を消去した共同生活

^{※1} 小説内では「フォード歴632年」(フォードが大量生産方式でT型自動車を完成させた1908年を起源とする)

^{※2} ホグ・ファームが他にビー・集団と主催したウッドストックフェスティバルに登場した人数。

表1 本論文で扱う集団

がら形成されている。すなわちこの図が浮かび上がらせる構造は、自然から疎外されて成立した人間像である。よって人間が、自然性への回帰を試みる、あるいは反自然的に存続しようとする時、これらの集団は特異解として出現したのである。

各集団を極限型の代表事例とし、集団の成立背景・集団秩序の編集過程・さらに解体に至る諸問題を分析することで、空間としての秩序化(すなわち形態化)を試みる近代の人間の根源的問題に迫ることが、本論の主題である。

第3章 類型I: 集団における性差の消去—シェーカー

本章は、シェーカー教(1774-)における集団秩序と建築・家具の設計から、集団における性差の消去と建築空間の相関関係と、その要因を明らかにすることを目的とする。

シェーカー教は”男女が対(つがい)になる”という自然原理(〈対幻想〉)を敢えて疎外したにも関わらず、男女の共同生活を行った。創始者アン・リーは、産業革命直前のイギリス・マンチェスターのスラムで誕生し、繰り返し出産に失敗を体験する。マンチェスターは、地方からの労働者流入が激しく、労働環境と居住地が隣接した劣悪な居住地だった¹。アンを師とするシェーカー教徒は、過密から逃れ、アメリカという新天地を目指すことで、スラムからの逃走と、再生産の悲劇からの逃走を実行する。

シェーカー教の建築は、主として二種類の性質を持つ。一つは接触の禁止を恒常的に成立させるための空間的性質を利用した建築である。シェーカー教の建築が主に断面方向において機能別になっているのは、建築拡張を合理的に行なうために、垂直方向の増築が容易であったからだ。そのため彼らは、牛の餌の昇降機なども発明する。

もう一つは、性差を消失させるための間取りである。そのために、平面は左右対称もしくは点对称に構成され、「二次元上での合同」形²が選択された。

性差による空間分割を行なうことで、シェーカー教建築はラカンが述べたシニフィアンの問題³に遭遇する。だがシェーカー教徒に



図2 シェーカー教"ユニオン・ミーティング"の際のセッティング

は、Millennial Laws(千年王国の掟)に書かれた戒律の遵守によって体得するものであり、外部の人間が識別できるものではなかった。その中では、男女それぞれの歩き方や左右の優先順位まで細かく指摘されている。結果、一見同一のシニフィエを持つにもかかわらず、差異化(経験としてのシニフィアン)が成立した。この差異が表出するのは、人間の身体的差異、すなわち家具レベルにおいてである。ミーティングルームの座面の高さの差は、偽ることのできない性差の徴である。また、椅子と椅子の間に敷かれた絨

毯は、単なる敷物としての役割だけでなく、男女が6フィート離れてミーティングするための基準線でもあった(図2)。空間に関わる機能性の追求は、人間の身体という生体的差異を受け入れざるを得ないのである。

第4章 類型II: 機械化された世界—『すばらしい新世界』

ユートピアとは、古い時代の危機において新しい思想を示した「どこにもない場所」(ギリシャ語の ou-topos)を指す。本章は、20世紀初頭のSF小説『すばらしい新世界』(1932)における、画一化された群集像と都市の様態から、オルダス・ハクスリー(1894-1963)によって構想された世界像と、その思想背景を明らかにすることを目的とする。

生殖(に関する禁忌)を問題としない、都市へと溶解した〈拡張の兄弟〉すなわち群集とは、一見自由に運動する複数の個体がある層で切り裂いたときに見ることのできる面的な領域である。このような集合体は、現代社会においては“唯一の閉鎖系”ともいえる家族と相補的ではある³が、流動的で伸縮性を持つ都市は、無関係な他者同士を生殖によって結びつけ、容易に家族へ変質させる危険も孕んでいる。すなわち現代社会においては、家族と群集は必ずしも分離せず、互いが互いの排他的要因とはならない。その点、SF小説の全体性・画一性は、極限型として完成された世界を持つ。

ハクスリーのSF小説『すばらしい新世界』(1932)は、フォード歴632年という新しい紀元が設定された500年後のロンドンが舞台である。この世界では、人間は巨大な人工孵化場で生産され、生まれつき厳密な身分階級(カスト)に分けられており、誰もが自分の位置に満足して幸せに無知に暮らすことによって安定が保たれている。

小説の紀元設定にもなっているヘンリー・フォード(1863-1947)は、大量生産、組立ラインによる生産の効率化を実現した。小説内の人工孵化場は、巨大建築の中で、あたかも自動車が組み立てられていくかのように孵卵器の調整過程が可視化され、フォードの自動車生産ラインを彷彿とさせる(図3)。

また、小説内の未来都市ロンドンは、階級ごとに厳密に住み分けられている。

中央ロンドンと、周辺の環状郊外地域の間には、6km幅の緑地帯が設けられているなど、都市像の背景にエベネ



図3 1908年10月1日、T型フォードがはじめて販売される日の出荷を待つ車たち。組立ラインの開発による大量生産は、一台のフォード車を24秒で作ることを可能にした。

ザー・ハワードの『明日の田園都市』(1902)らの田園都市構想があったことは十分に想定される。

実は作者オルダス・ハクスリーは、祖父トマス・ハクスリー(1825-1895)、兄ジュリアン・ハクスリー(1887-1975)という生物学者一家のもとに生まれた。またトマスは、近代

都市計画の父パトリック・ゲデス (1854-1932) の師でもあった (図 4)。ゲデスは、もと生物学者として出発し、生物における進化論を都市の成長に応用したのである。彼は著書『進化する都市』の中で、「生活と進歩とは、仕事と場所を持った民衆の向上と、民衆を伴った仕事と場所の向上との相互作用である。——進化する都市と進化する民衆とは、相携えて進歩するのである」⁴と述べている。生物進化論の訓

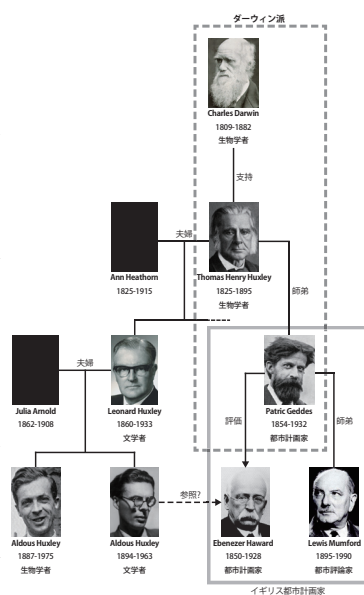


図 4 オルダス・ハクスリーとその周辺

育は、ゲデスによって資本主義社会の発展と都市拡張になぞらえられ、20 世紀の都市像を予見した。作者オルダス・ハクスリーを囲む、これら人間関係と歴史的背景が、SF 小説の世界観にも示されている。

第 5 章 類型Ⅲ：配列化された世界と人間不在一分裂病患者病棟 "ヴィラ 21"

マルクスによれば自然とは、「人間活動の素材」であり、「諸法則において、いわば完成して存在する」「完全なる客体」である⁵。外なる自然と人間は、身体によって分節されている。よって本来、人間と自然との連続性は、身体の喪失一死によって獲得できる。本章は、分裂病を発症した患者たちと治療者の共同生活の実践方法から、人間の内面に現れる空間の性質を明らかにすることを目的とする。本章では、15 歳から 20 代後半までの若い精神分裂病患者とスタッフ (看護婦・医師など) 達の共同生活が行われた実験的治療共同社会 ヴィラ 21 (1962-1966) を対象とする。分裂病が進行すると、死が個としての経験を超え、他者のための事象となる。それは、「人間の物化一人を取り巻いている物とか、人と対置されている物へと、人をきわめて便宜的に転化してしまうこと——が進み、ある臨界点を超すと、整然と配列された無限に完全化できる客体と、人間不在しか残っていない」⁶状態である。発案者の精神学者クーパー (1931-1986) は、分裂病患者の「精神を豊かにするような孤独が、何にも侵されないで維持されていて、しかもそこに人間同士の外界や内界の間に触れ合いをもつ共同性が存在していなければならない」とした。患者とスタッフは "コミュニティ・ミーティング" を通して、起床時間の自由化・作業労働の選択自由化を共同決定していく。そこでは、スタッフが患者のベッドで寝ることで、スタッフの役割を認識した患者の自発的起床をうながすなど、ゲーム感覚で患者と治療者の役割が交換された。

結果、スタッフもまた "患者になっていく" 症例が現れた。分裂病の性質である個の喪失は、すなわち演技者と観客の同居であるが、患者と看護婦たちの役割交替は、その拡張でしかない。このように、客観的他者としての自己の分裂もまた、近代の病理であり、内面における空間認識の発見のでもあるといえよう。

第 6 章 類型Ⅳ：拡張された "ファミリー" —ヒッピー集団ホグ・ファーム

本章は、制約なしに自由に〈性〉的關係を持つ〈自然〉を追求した、ヒッピー集団ホグ・ファーム (1967-) の集団性質と、成立の社会的背景から、彼らの体得した空間感覚とその性質を明らかにすることを目的とする。ヒッピー集団の成員は固定的ではなく、時に集団同士結合し、また離れ、アメーバ状の拡がりを持っていた。このような乱婚状態は、吉本の指摘する通り⁷、〈対なる幻想〉を疎外し、慣習化しえた集団のみに見られる。

ホグ・ファームは、コメディアンあがりのヒュー・ロムニーという男を中心に、カリフォルニアのサンフェルナンド・バレーの山頂の養豚場に作られた (図 5)。当初は、テント小屋や掘っ建て小屋を寄せ集めて一緒に住むようになった 50 人程度の旅集団で、養豚場の豚の世話をすることで、家賃を払わず滞在できた。中古バスを何台か買い込んで車体を改造し、内部にベッドをしつらえて、ニューヨーク州のウッドストックからフロリダ州のオーランドまで、各地のロック・フェスティバルを訪ねてまわる旅に出発する。途中で気が変わると、ホグ・ファーマー達は一時バスを乗り捨て、サンフランシスコやニューヨークの友人の家やアパートに押し掛けた。

なぜ、彼らは制約のない〈性〉的な自然行為を体験として慣習化しえたのだろうか？彼らは言う、「女の子たちはみんな僕の妻だし、男たちはみんな兄弟だし、赤ん坊はみんな僕の赤ん坊だ。これが愛というもの——ほんとうの愛というものだ」⁸。そこには、LSD やメスカリンといった幻覚剤が開発され、若者たちの手に渡った影響も大きい。ホグ・ファーマーたちが主催した 1969 年 8 月 15 日から 17 日に開催されたウッドストック音楽祭は、野外フリー



図 5 南カリフォルニア山頂のホグ・ファーム。右にあるのが、落下傘型の絹布で覆われたジオデシック・ドーム。

コンサートとして推定 50 万人もの観客を集めた。だが、ウッドストックフェスティバルのもう一つの顔は、幻覚剤の巨大フリーマーケットでもあった。実はこの幻覚体験には、オルダス・ハクスリーが自ら被験体となって綴った『知覚の扉』⁹という聖書がある。ハクスリーは幻覚作用によって、「人間がこのような仕方で見るとすべき事物が、この世に存在しているのだ」という了解を得る。視力の弱かったハクスリーは、幻覚剤を通して出会う「ものの見方」こそ革命だと考えた。有識者がこれらの作用を用いて、より良い社会を統治することこそ、ハクスリーの理想でもあった。また、彼らの移動生活のシンボルとなった建築、ジオデシック・ドームは、定住しないための建築の最適化一道具としての建築の発明であった。ホグ・ファーマーたちは、ロックフェスティバル参加という遊動性を先行させたために、居住空間の獲得というプロセスも最低限に短縮せざるを得なかった。その合理的解決方法が、仮設建築を持ち運ぶことであり、これが実現している限り、彼らは根拠地を持つ必要はない。逆に言えば、移動組立可能な住みかは、遊動性そのものに起因している。道具としての建築空間から見る世界は常に場当たりの、目的に適っていれば地理的差異をも捨象しうる。

幻覚剤による、「私の私でない部分 (Not-self) がそれのそれでない部分」の中に入って過ごすという超身体的体験⁶が、ヒッピーたちが固定化されない地上の楽園を作るためのきっかけになった。また、身体拡張の道具として自由に移動可能なジオデシック・ドームや、ベッド付き住まいに改変されたバスが、集団の遊動性を支えた空間であった。

第7章 考察：マンメイド（人工）の世界に建つ「家」

18 世紀から 20 世紀にかけて現れた（あるいは描かれた）、奇妙な 4 集団の集団構成と建築の相関関係を見てきた。これらより、以下のように考察した。

A. 土地について：大地の占取性と居住問題 まず、シェーカー教やヒッピーが、新天地としてのアメリカでよく発達したことは考慮する必要がある。彼らにとって、未居住の大地が広がるアメリカは、ユートピア実現に適していた。一方で、シェーカー教やオルダス・ハクスリーが出身地としたイギリスは、急激な産業発展により、都市のスラム化という深刻な居住問題を抱えていた。イギリスの経済成長とそれに伴う住宅供給問題を解決しようとしたのが、『明日の田園都市』や『進化する都市』などの田園都市構想である。これらを論じる際、社会性・共同性を前提とする建築と、国家基盤としての家族という構想は、うまく平仄が合っている。20 世紀初頭に希求された〈都市における住まいのあり方〉は、資本制核家族を誘起する装置だったともいえる。

B. 思想について：都市像・身体性への進化論の応用 これら近代都市計画は、ゲデスが生物学者として出発したことからも分かるように、ダーウィンらの進化論を下敷きに

している。都市に援用された進化論は、過密や流動化が進行する現代都市を予見してもいよう。一方で、これらの構想が都市の管理システムをも実現したことは、本論の命題である近代建築と人間の齟齬、すなわちユートピアを社会的に作ろうとする矛盾と相似形にあるのではないか。

ハクスリーが構想した未来都市像もまた、進化論に基づいている。彼は新しい都市だけでなく、幻覚剤による新しい知覚といった空間概念をも拡張しようと試みた。幻覚剤によって、可視性を持つユークリッド空間はとたんに変形され、「絵に描かれた服のひだ」¹⁰といった非写実的な造形の部分性がリアリティを持つ危険な回廊への道を開く。

C. 集団形態について：核家族の変形としての大家族 4 集団はどれも、核家族という、人間の再生産を担う普遍的基盤として残存・成立してきた集団の性質とは対極の性質を持つものだ。対極の性質の集団が出現する背景には、〈家族〉が資本主義社会を支えるカテゴリーとして形成される時代¹¹と同じ作用線上にある。

すなわち、核家族の批判として出てきた諸集団は、資本主義社会と連動する延長線上にある。実現した集団は、核家族から拡張された家族への変形でしかなかった。

D. 空間について：言語としての空間の臨界設定性 歴史的コンテクストのない地に作られたユートピア建築たちは、のちに改変される運命にある。シェーカー建築は収容所や学校になり、ホグ・ファーマーはサマーキャンプ集団になった。これらは都市的な事象として散逸している。すなわち、空間が生来的に持つ共通言語としての性質は、容易に改変されうる臨界状態の表層である。言い換えると、空間はそれ自体で成立していることで、転用（新しい解釈）による臨界状態の転倒という手がかりを保持している。

結論

本稿では、核家族の性的・自然的性質の分解によって、人間の再生産に関わる集団の見取り図を作成・類型化した。このうち、核家族と対極的な性質をもつ集団 4 例の構造分析を行い、18 世紀から現代にかけての欧米における土地・思想・集団形態・空間に関する居住問題を明らかにした。また、それらを乗り越える空間のあり方として、転用による臨界状態の転倒という手がかりを指摘した。

注

1: エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態—19 世紀のロンドンとマンチェスター』1842 年 2: 岡崎乾二郎・中谷礼仁「発明の射程」『10+1』No.15, 1998 年 3: エンゲルスの言葉を借りれば、「家族」は「私有財産」、「国家」という各カテゴリーと連動して成立している。この点、開放形に向かう群集と、閉鎖形に向かう家族は、私有化という経済システムを介して双曲をなしている。 4: バトリック・ゲデス『進化する都市』1915, p.22 5: アルフレート・シュミット『マルクスの自然概念』1971, 6: D・クーバー『反精神医学』p.158, 7: 吉本隆明『共同幻想論』1968 8: TIME-LIFE BOOKS『アメリカの世紀 (1960-1970)』ヒッピー、ブラック、プロテスト 西部タイム、1985, p.58 9: オルダス・ハクスリー『知覚の扉』1954 10: 同左、11: エンゲルス『家族・私有財産・国家の起源』1884

図版典拠

図 1、表 1: 筆者作成 図 2: ジューン・スプリッグ『シェーカー—生活と仕事のデザイン』平凡社、1992 pp.100-101 図 3: 1 October - this day in history: <http://www.history.co.uk/this-day-in-history/October-01.html> 図 4: 筆者作成 図 5: Avant Garde Magazine Issue no.5, 1968 p.85